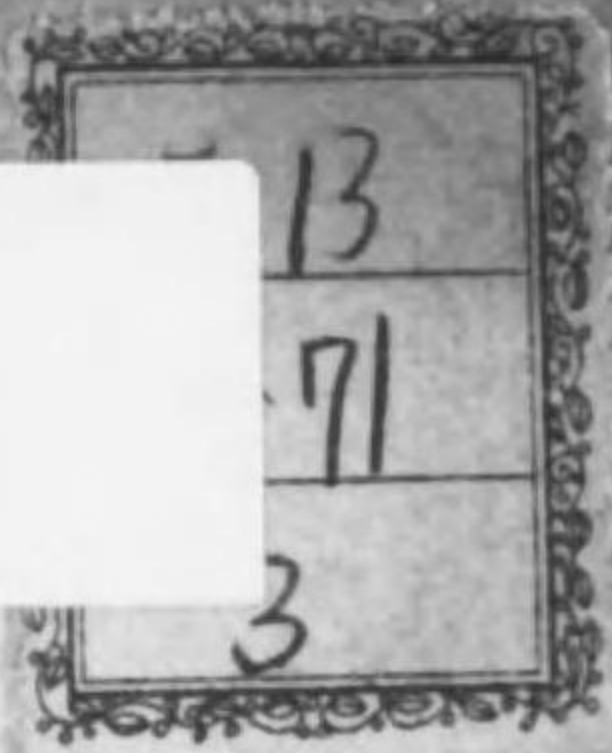


F13-Mu71-3ウ

室



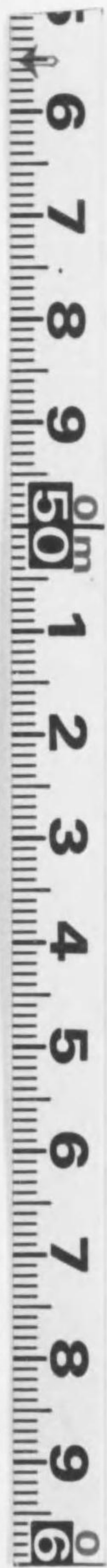
1200500762836



蝶



細川叢書



始



蝶

F13
Mu71-3



7

細川叢書





人の死といふことも妙齡の少女の死ほど、襟を正さしめる清らかさを
感じしめるものはない、少女は死ぬも生きるも、ともにあでやかで、人
として人のすることをしないで死んでゆくといふことに、いたみつくせ
ない美と、測り知らぬくやしさがあつた。甚吉はいくたびか少女の死と
いふものを眼にし、またそれを聞きたびに毎時もあたらしくやしき、
勿體なさを遙かに遠くの方に向つて感じた。遙かに遠くの方に向つてな
どといふ空虚な言ひ廻しはありえないが、結局、さういひあらはずより



外に適當な言葉のないのも、死といふものの正體だつた。

甚吉の娘の君子ももう女學校の五年生になり、若木の櫻のやうに伸びて行つたが、學校ではいつも何處にゆくにも連れ立つ五人の友達があつた。街に出て映畫を見るとか、お茶や食事をするときでも大てい五人そろつてするらしかつた。その一人二人がかはるがはる甚吉の家に来て、君子と復習や雑談に半日を暮らしてゆくが、はじめのうちは甚吉は女學生といふものはどの子もよく似てゐるやうで、誰が誰やら、その特徴をとらへるに甚だ困難だつた。ただ一人みんなから圖抜けて背丈の高い子がゐてその子が山ちゃんといふ異名がついてゐることを知つた。十八歳で五尺三寸かつきあるといへば、とても眼に立つものであつた。甚吉は娘の友達とは庭からちよつと頭をさげるくらゐで、あとで今日來たのは何といふ人かとたづねるが、あれは山ちゃんだといつたきり山ちゃんとはど

ういふ意味があるのか分らなかつた。そのつぎに來たのはくり子といふ子で何處かくりくした子で、三年生くらゐの時からいつも喫驚りしたやうな眼付をしてゐたが、五年生になつてから眼のふちに深みができて、少女を乗りこえようとした漂ひがあらはれてゐた。君子はこの有名な料理店の娘のくり子とは學校でお菜の分け合ひをするらしく、けふのくり子のきんとんはともうまかつたとか、くり子め、おいしいと言つて金澤のものさへ見れば喜んで食べると言つて珍しいものがあるとおべんたうに入れて持つて行つた。このくり子は家に來るとピアノの部屋で君子とくしやくしや喋つてゐるばかりだが、他の娘達も來るとただひつそりかんとして、ほかの者のきこえない聲で話し合つてゐた。

たな、とこ、せのちん、この三人の愛稱もどういふつもりで名づけられたのか分らなかつた。たなは下町の娘で、女學生と娘とを半分づつ持

ち合したやうなところがあつた。ここは一等娘々らしく、せのちんはどこか令嬢的であつた。五人の女學生はどういふ場合でも本名を呼びあふことがなく、「山ちん、ねええ。」とか、「せのちん、ねええ。」といふふうに呼んでゐた。「とことこ。」と誰かがさう呼ぶと、ここはすつかり自分の名前だところえてゐるらしく、なあにといふ。そして甚吉の娘の君子はむろつ子と呼ばれてゐて、むろつ子、むろつ子と呼ぶと君子はそれになれて平氣でなあにと答へてゐた。

甚吉の妻のうめが中氣で二年間も病んでゐるときにも、お見舞に來てくれたのがこの五人の少女であつた。かの女らは一人づつ別の花の包みを持つて靴音をしのばせ、なせか、すこし頭をちぢめるやうな恰好をして、庭の敷石をつたつて來たときは何か異様な、ものすごい光景であつた。黒のオーバをからだにきつちりと著込んで、五人もそろつて眞赤な

顔をして少時庭の中に立ち、君子の出てくるのを待つてゐる逞しい姿は、庭のなかの繊細な配置をはこる風致を一瞬にして消え失せしめた感があつた。甚吉はいつも娘の友達を見るとその大きいのに驚いて、これが娘と同じ年頃であらうかと、その友達のなかでも一等大きいのが甚吉の娘だといふことに更に氣のつくのも、たいてい彼女の大きいのに眼をみるとときにさう感じるのであつた。彼女らは甚吉に會つてべつに病人のこをきくでもなく、ただ、頭をさげて挨拶するばかりであつてお見舞の言葉なぞ一つもいはなかつた。

例によつてみんな固まつて膝をつき合して低い聲で話しあふと、それきり花を疊のうへに置いて歸つて行つた。音を立てていけないと思ふのか、靴の先で歩いて庭の中を出てゆくのであるが、異様な髪のがさも、少女ゆゑの美しさで甚吉は啞然としてみおくるのみであつた。へ

いせい甚吉のことを話しあふときは甚吉甚吉と呼び放しにして、「むろつ子の甚吉は文學者だからむろつ子に理解があつていいわ。」と、彼女らが彼女らのそれぞれの父の批評をするときにさういひ、恰も文學者といふものはその娘をひとなみの父親以上に最肩にしてゐるもののごとき口調であつた。だから君子は、時々買物を不經濟だといふ甚吉を見損つたといふやうな顔をして睨んで見せ、皆は理解があるやうにいふが、實際はちつとも理解なんかないぢやないのと、これまた恰も甚吉が、彼女らに買ひかぶられてゐることの不當をなじり、いかにもくやしさうな語勢でいふのであつた。甚吉は甚吉で一々理解してゐては毎月の半分以上は買ひ物をしてゐなければならぬから、あまり理解しないことになると、つい、笑つていふやうになつてゐた。

去夏、彼女らは來年の三月には學校を卒業して別れてしまふのである

から、女學生としての今年の夏のお別れをしたい、だから親友五人とも招んで見たいと君子はいひ、甚吉もそれもよからうが母親は東京にゐて誰もまかなひをする者がゐないから、皆さんが好きな料理を自分でつくり女中を煩さないなら賛成する。今年は米も信州にはないだらうから大體十日間といふ豫定にし、お米も何も彼も皆さんで遣るがい、六疊と五疊の二間續きに板の間二疊分の北側の離れをそつくり使つてもよろしいと甚吉はいひ、賛成したのであつた。

夏たけなはな信州に間もなく五人の娘達が遣つて來て、すぐ木綿の袋を取り出してそれぞれの米を女中のはる子に手渡した。はる子は信州も山の奥の者だつたから、一人一人の袋から取り出した米を手のひらに乗せて、東京の人はどういふ米をたべてゐるかをしらべて、透したり指でより分けたりして眺めてゐた。そしてはる子はくり子の持つて來たお米

をふしぎさうに見て云つた。

「旦那様、かういふお米は見たことがございません。」

甚吉は米のことは知つてゐないが、くり子の持つて來た米であるから、よその國の土にできた米であるかも知れない。くり子は八百善の娘だつた。

朝、みんなが起きて母屋の湯殿に行くときに、庭を掃いてゐる甚吉の姿を見ても、ちよつと軽く頭をさげてゆくばかりで、誰もお早うとも、いゝお天氣だともいふ者はゐなかつた。戯談もいはなければお愛想もいはずに、あまりに卒氣なく取つつきにくい人達だつた。甚吉はどうして女學生といふものはかうも愛嬌のないものだらうと、見てゐるうちに甚吉自身がいつも女學生達と反對の人と話をしてゐたことに氣づいた。そして彼女らはただに野蠻に近いくらの人間として新鮮無類の人だちであ

ることが分つた。だから甚吉は此方から機嫌は取らなくともいいし、ただ好きなやうにして置けばよかつた。彼女らは一日一圓あて出し合ひ、都合六圓でお八ツまで揃へ、甚吉が仲間入りする時は甚吉自身の分を出すことにしてゐた。時々食卓のうへで皆で紙入を持ち出して、何やら永い間計算をしてゐたが、計算してゐるといふよりも悲しくよごれた五十錢紙幣や十錢白銅を皆してしばらく遊ばせて遣ることによつて、勝手に渡り歩いて苦しんだお金をしばしねぎらうてゐるやうなものだつた。夕方は五時に家にもどるやうに夜は十時に寝るべしといひ渡してあつたが、夜はたいてい十二時近くまで離れで騒いで、甚吉の一寢入りしたあとまで起きてゐた。寝る時間まで生かして話したいらしいが、そのあひだにも、呼吸器を悪くしてゐる山ちゃんだけがいつも先に床にはいつてゐた。山ちゃん、ゆうべ睡れた？ と誰かがいふと、山ちゃんのはのんびりした聲音

で、もうちよつと静かにしてくれないとちつとも眠れないわ、今夜からあつちのお部屋の一等はしの方で寝るわ、でないよ、両脇で話をされるからどつち向いて寝てゐても、話聲が邪魔になつてねむれはしないわ。ゆうべなんか少しねたかと思ふとまだお話ししてゐるんだものと、山ちゃんは聲だけでたしなめるやうに云つてから、でも随分なれちやつたわと云つた。實際、五人も一しよに枕をならべて寝てをればつい話をするやうになり、結局、話し疲れてねてしまふまで、絶えず話聲が誰かの間につづけられてゐるやうなものだつた。それは毎晩、庭をへだてて甚吉の書齋まで聞えて来てゐた。

山ちゃんは一昨年の夏も一週間ほど甚吉の家に遊びに来てゐたから、離れはおなじみの部屋だつた。背丈の高い人はからだの平均がとれないのか、山ちゃんは胃が悪く肺もわるかつた。だから甚吉のはからひでそれと

なくはる子にお箸はどれだけいつても一々棄てること、お茶碗類は熱湯をかけることをいひ、そんなことを皆にかくさないで公けに話して置いたが、娘たちはそれに賛成して山ちゃんにくらい思ひをさせなかつた。

山ちゃんはゆるやかに笑ふと母親のやうな優しさがもう顔の中にあらはれてゐて、なりが高いのでいくらか顎をすぼめるやうに笑つた。甚吉もいつのまにか山ちゃんと呼ぶやうになるほど、山ちゃんといふ呼びよい滑稽な名前にしたしんだ。プレツツの前をとほると、夏だけ店員になる大學生らがいつのまにか山ちゃんといふ名前を覚えてゐて、ふいに、「山ちゃん……」と用もないのに面白半分に呼んだが、甚吉がついてゐるのを見て、極り悪く店のなかに這入つてゆくこともあつた。

「をちさま、あかしかいじんの本ございません？」

或る日、山ちゃんはめづらしく本のこと、茶の間でお茶をのんでゐる

甚吉にさうたづねた。この茶の間は四疊半しかなかったが、庭苔と庭木が疊とすれすれに蒼さを追らして来るやうな、そんな氣持の落著きと明るさを持つ部屋だった。

「あかしかいじんの本とは何なの。」

「歌をかく人。」

「あゝあの明石海人かね。雑誌に出た歌ならさがして見たらあるかも知れん。山ちゃんは歌が好き。」

「可哀想な人ですから読んで見たいの。」

「あかしかいじんの歌はみんな読んであるかね。」

「さあ、誰も読んでゐないでせう。」

癡歌人の明石海人の歌がやつとその年あたりに認められてゐるやうな、甚吉ですらまとめて読んでゐない時分だったから、山ちゃんはほかの娘達

より文學が好きなのであらうと思つた。

「山ちゃんはいろんなものを読んでゐるわ。」

君子は山ちゃんは文學の好きな少女かも知れないと云つてゐたが、甚吉には特に山ちゃんが、文學を好愛する少女には見えす、また、そんな種類の本を讀んでゐないやうであるが、明石海人の歌をよんでゐることに甚吉は好意を持つた。すつと前、甚吉がまだ二十幾つくらゐの時分に少女を見るとすぐ文學の香氣にほひのやうなものを感じ、たいていの少女は詩とか小説を好きなやうなものに考へてゐたが、このごろはそんな文學の香氣にほひなど年若い女の人に感じたことがなかつた。年とともに變つてゆく甚吉の感覺も瘠せほそれてゆくやうであつた。甚吉はときどき君子やその弟の貞吉の生活に注意してみても、どこにも、文學的などころがなく、それでたすかるやうな氣もするのであるが、たまには詩くらゐ讀んでゐ

てもよきさうに思はれることもあつた。君子の友達でも、君子だけが文學書を読んでゐないらしく、時々、「風とともに去りぬ」といふ本、面白いんですかとたづねることがあつたが、甚吉はそんな本なんか讀まない方がいいと答へるより外に、答へやうがなかつた。

「文學者の娘とか息子とかいふものは多少とも文章はうまいもんだが、君たちのやうに本を讀まないのもすくないね。」

「どうもあひ濟みませんです。」

と、娘がませ返して笑つた。

「まだどうなるか分りませんよ。」

中學二年の弟は辯解するらしく云つた。

夕方、毎日のやうに食後に町にでかけて散歩するのだが、甚吉はちよつと買物をするために山ちゃんに洋杖ステツキを持つてゐて貰つたことがあつた。

買物の大きな包みを提げて再び道路に出たときに、山ちゃんと君子はだいぶさきに歩いてゐて、急に山ちゃんが見ちがへるほど外人風に見えたのに驚いた。五尺三寸もある山ちゃんは哈爾濱のキタイスカヤで購つた獨逸製の銀の握りのある洋杖をゆつくりとついて、少し反り身になつて歩いてゐる恰好は、ちよつと素晴らしい胸のすくやうな壯麗さがあつた。輕井澤の町は坂になつてゐるから、下の方からは一層山ちゃんのなりの高さが見立つて見えた。そしてそれはこの場合洋杖についてゐたから一際効果があつた。追付いて甚吉が云つた

「山ちゃん、洋杖がとてもよく似合ふ。」

「さうか知ら？　ちや、もつとおかりするわ。」

甚吉は洋杖が少女に似合ふことをはじめて知つた。銀のかざりのある洋杖といふものは氣障なものであるが、この獨逸製の銀のかざりは鯨の

やうな顔をしてゐる蒙古の犬の頭が深刻りにされてゐて、處どころに燻し込んだ、やにのやうな深い刻りがうづ巻いてゐた。

山ちんと君子は今夜も寶石のある店さきに立つて、あれかこれかと、眼を美しい石のあひだに遊ばせてゐた。本物の材料をほんの少しつかつた、高級なおみやげ物を商ふ店だつた。

「どうしても買ふわ。」

甚吉はその聲音の強いのに驚いた。碧い玉と、珊瑚色の玉とをならべて、山ちんは決心したやうにさう云つた。

「をぢさまにえらんでいただくわ。」

甚吉はそばに寄つて二種類ある指輪のそのどちらかの玉をえらばなければならなかつた。

「この碧い奴がいい。」

「けど、さんご色してゐるのもいいわ。」

「ちや、両方にしたらどう？」

「そんなにお金ないわ。」

山ちんはさきの細れたやうな昂奮をませた聲で云つた。

「ではやはり珊瑚色か。」

山ちんは物を購ふときにする物悲しい顔付に變へた。

「このつぎに購ふことにしてもいいわ。」

「山ちんはね、お父様。もうびいびいなよ、氷菓ばかりたべてゐるから、少しかしてあげてよ。」

「貸すよ。」

君子は山ちんとくしやくしやと何か話しあふと、山ちんはうんうんと肯いて先刻の物悲しい顔付をどこかにしまひ込んで、眼だけを甚吉の方

に向けて顔は君子とむかひ合ひにしたまま、實に美しい眼をして何をいつてゐるかお分りになると云つた。甚吉は笑つて紙入を君子に渡し、山ちゃんはさんご色の少女の好きさうな指輪を一箇購つた。君子もべつの胸かざりを購ひ、さういふ光景は夏の夜らしく愉しいものだつた。

懐中電燈を照らしながら小徑をゆくと、草の上に脚の長い青い大きな蟲が、もう羽根をひろげてすだいてゐた。

「輕井澤つてお金いるわ。」

「散歩しながらお買物するからよ。」

「こおんにもするぶんかかるからなあ。」

突然、弟の貞吉が云つた。

「貞ちゃんのこおんと來たらすごいわ。」

山ちゃんは貞吉のこおんには驚いてゐた。實際、少し話はずむと、貞

吉はすぐこおんをかけよう、こおんにしよう、こおんを食べよう云ひつゞけた。それほど氷菓のどが旨いのか、甚吉には想像の外であつた。貞吉のこおんを食べることは、腹をこはさないかぎり禁めることは甚吉といへどもできなかった。この中學二年生の貞吉は毎月のバスの乗車券の五圓券を一帖、月のはじめに甚吉から受けとると、雨のひどい日の外は根氣好くかなり道のりのある驛まで歩いて行き、バスの乗車券は一さい使用しなかつた。そして月末になると乗車券をそつくり返して、例のごとくゴム印刷で乗車券何十回分何圓何十錢、右明朝迄支拂相成度候也、昭和十五年何月幾日、貞吉と記した請求書を下の茶の間の彌針臺の上に置いてあつた。甚吉はそれだけの金額を同じ彌針臺の彼が置いてあつたところに、置かねばならなかつた。學校の月謝、靴の直し、電關の本雜誌代、切手代等悉くゴム印刷にして同様彌針臺の上に置き、額面

が貳拾圓近くなると但右は明朝と明後日との二回の支拂にても宜しく候と、斷書がしてあつた。零細餘さず集めて金は女中の買物のお剩錢に新しい紙幣のあつた場合、これに取り換へ或ひは甚吉にそれを取り換へに來ることもあつた。それらは自分のトランクにしまひ込んで、夏、輕井澤でつかふ、^{おん}の代にあててあつた。

冬の寒い日お八ツの時でも、貞吉はいひつづけた。

「プレッツのおんはうまいなあ。」

そして貞吉は一年間に三十何圓かを案出して、そつくり輕井澤で惜氣もなく人にも奢り自分でも、^{おん}を食べてゐた。だから、甚吉はさういふ苦心からなる^{おん}を禁止することはできなかつた。甚吉は心のうちでおれの酒みたいなものだ、おれから酒をとり上げることができないやうに、^{おん}を取り上げることができなかつた。

姉の君子はいつも小遣錢はさきにつかつて了つて、^{おん}を食べるどころでなかつたが、貞吉は傲然として、姉に振舞つてやつてゐた。

「何だい、^{おん}はもう十幾つも奢つてあるぞ。」

甚吉の家庭でも、^金を政府に賣ることにし、指輪一箇、洋杖の金の輪、時計の外側、そんなものを集めて賣つた金が九十八圓あつた。そしてその金をどう使ふべきかと茶の間で話し合つたとき、貞吉は即座に思ひついて、かういふときでなければ云へないと急きこんで云つた。

「自轉車を買はう。」

甚吉はこれは却々うまく出て來たと思ふと、貞吉はたたみかけて云つた。

「第一バスの金はいらないし、お使にもゆける、家から出かける時間もゆつくりできる。もう一つ、輕井澤では自轉車の借代もいらん。」

「なるほど、自転車を買ふことは賢明な策かも知れないな。」

「かういふ時でなければまた機会がありませんよ。」

君子も妻のうめも賛成だった。甚吉も自転車の便利なことは電話をとるよりも、かしこい策と思はざるをえなかつた。毎年相當の借代を支拂ふこともさうであるが、貸自転車といふものは感じの粗悪な貧弱なものであつた。甚吉は彼のいふやうにこんどは自転車を買ふことに決心した。「それでは自転車をしよう。」

實際、それは至極妙を得てゐる考へだつた。バス代、輕井澤の自転車借代、局への使、醫者への使、凡てに於て必要なものは自転車だつた。

「萬事まかせるから買ひたまへ。よく調べて買ふんだぞ。」

貞吉は近くの自転車屋をさがし廻つたが、どこにも新しいくるまはもうなかつた。かうなると貞吉にはかり委せて置けず、甚吉は出入りの人

にたのんで見たものの空しい一週間は過ぎてしまつた。

貞吉は學校戻りに新橋界限をさがしたが新製品はなかつた。そのうち、出入りの者の世話でやつと買入れることができた。その金額の百拾圓を持たせて引取りにやつたが、夕方、元氣好く海岸近くにある町から貞吉はもう新調の自転車で帰つて來た。

「とても素晴らしいなあ、ちつとも、がたびししない。」

出て見ると、後輪のおほひの板金に東京市大森區何丁目山上貞吉と、すでに名前まで書いてあつた。甚吉は金を賣つてこんなふうまく金を利用したことが、がらになく成功したと思つた。

貞吉はからだが軽く乗ることもうまかつた。彼は税を拂つてから後車を見る鏡を取り付け、電燈を装置し、掃除する油を買ひこみ、餘程嬉しうと見えて、

「あゝ、たうとう自轉車買つちやつた。」
と、或る日ひとりごとを云つて喜んだ。

彼は自轉車で毎朝驛まで通つて行つた。よく光る自轉車だと通行人が云つてゐたぞ、といふこともあつた。やゝ親しい客があると、貞吉は庭の中の敷石の上に態々光る自轉車を引き出して、用もないのに書齋から見える位置にかざり立ててゐた。實際、輕井澤に行くやうな家の子供はみな自家用の自轉車を持つてゐた。貞吉のなやみも苦勞も、毎夏、いかなる貸自轉車が手にはいるかにあつた。永い間の申出であつたが甚吉は自轉車にちつとも乗れず、同情もなかつたから、買ふこともなく過ぎて行つた。家を建てる時に植木屋に十五圓の自轉車を買つてやつたら、旦那、あつしはゆんべは嬉しくつてちつともやすまれませんでしたと、ほこほこして云つた。貞吉はこんど輕井澤に行くまでは雨に一度も打たさ

んやうにし、びかびかにしてすッ飛んでやるぞと、輪にある矢骨を、布きりで叮嚀に一本一本あぶらで拭きながら云つてゐた。

或る日、貞吉はにこにこしながら自轉車で一と廻りして來てから、得意さうな顔付で、態々甚吉のそばにやつて來た。

「皆がいゝ自轉車だと褒めるし、スピードは素敵だからどうも可笑しいと思つてゐたら大變なことを見付けた。」

貞吉は殆ど獨り言のやうに云つて感心してゐた。

「どういふ譯なんだ。」

「普通の自轉車の齒車は四十五枚がおきまりなんですよ。オリムピックの自轉車だつて四十八枚きやない、だのに、僕の奴は五十二枚の齒車があるんだ。」

「お前あれをかぞへたのかい。」

甚吉はえらいことをいふと思ひ、あんな細かい齒車を一々かぞへたのかと、その根氣のいゝのに驚いた。

「五十二枚の齒車があつて百十圓とは自轉車屋もよく知らないで賣つたんですよ。」

貞吉は今時こんな素敵な車はないと云つた。

夏の旅行が終つてから九月の終りに、山ちんは大森の甚吉の家に来てたび／＼するやうに夕食を一緒にした。學校も休學してゐたが夏頃とは瘠せて聲がかすれを帯びてゐた。

「押出シの乗合はひどかつたね。」

「まるで死にさうだつたわ。」

淺間の熔岩の押出したあとに、皆で行つた歸途、バスが混んで身動き

もできなかつた。焼野原をはすかひになつた車體が、そのまゝの姿勢で馳りつづけた。一本の木もない焼野に朝鮮鳥のやうな小型の鳥が二羽飛んでゐて、夏とはおもへぬ満目蕭條たるものがあつた。此處はいつも秋の暮のやうな景色ばかりで夏なんかないのであらう。

遂に山かげで乗合がバンクして、山雨の音がきふに淋しく耳にはいつて來た。

「山ちん、坐るといゝね。新聞紙をひいて。」

「え、坐るわ。」

見榮もなく山ちんは床の上に坐り、顔色は黄味をおびて見えた。

「けふは山ちんに留守をさせればよかつた。」

「そりや可哀想よ、でも、とても面白かつたわ。」

混んだ中で戲談のやうに甚吉はさういつた。バスはやつと動いた。運

轉手も雨でびしょ濡れだったが、女車掌の髪の毛に雨がもつれて、情無
いくらの佻しい顔から湯氣があがつてゐた。

「でも、あゝでもしなければ押出シには却々ゆけないからね。」

甚吉は食事中に何度も山の雨の音を耳にかんじた。

「行つてよかつたわ。」

山ちゃんは死んでもみんなと行くつもりだと云つた。

「山ちゃんに席をあげようとしてもそれさへ出来なかつたんだもの。」

君子は身動きのできなかつたバスの事を云つた。

山ちゃんはおそくならないうちに歸るといひ、立ち上つたときに貞吉が

いいものを見せるから、山ちゃん、ちよつと來たまへといひ、玄關の間まに

つれて行つた。土間への障子をあけて見せると山ちゃんは、

「や、貞ちゃん、たうとう買つたわね。來年の夏は愉しみね。」

年上の女らしく口をきいて、とても、いい自転車だわと云つた。貞吉
は乗り心地のいいこと、これなら沓掛から追分、小諸あたりまご行ける
と云つた。山ちゃんは足が長くてうまく自転車には乗れず、輕井澤でもい
くら稽古してもだめだつた。

「來年はけいこして山ちゃんも自転車にお乗りよ。」

「あ、乗るわ、そして沓掛につれて行つて頂戴。」

「いいとも。」

山ちゃんは皆に門まで送られ、甚吉は毎日の日課の食後の散歩かたはら
前例なく停車場まで送つて行つた。それが山ちゃんが甚吉の家を訪ねた最
後だつた。バスの中でも、山ちゃんらしく落著いて甚吉から切符をうけと
ると、鳥渡頭をうごかしたきり、停車場まで交す話はなかつた。

停車場まで見送りのつもりで行つた甚吉はつい定期乗車券を持つ便利

さから、車の中にはいつて行つた。

「をぢさまはざんざ？」

「ついでだから。」

「わたくしならもういいわ。」

甚吉は新橋で降りて、階段の上でちよつと立停つて車の方を見返つたが、すでにうごいた車の中では山ちんの顔がどれだか、分らなかつた。人は永別するやうな時には何か心によりどころがあるものらしかつた。

十二月十七日、學校からもどつて來た娘は突然、甚吉の書齋にはいつて來ると、或る恐怖におびやかされたやうな眼色をして云つた。

「山ちんは入院してもうだめなんですつて。」

「山ちんが入院した、……」

「もうだめなんですつて。」

「どうして分つた？」

「ゆうべとこのところに電話がかかつて來てみんなに逢ひたいから來て下さいと、お母様がさういつて是非明日といふんです。」

「よほど悪くなつてゐるんだね。」

「お醫者もいまのうちに逢はせるお友達があつたらと仰有るし、いままで入院してゐたことを皆に云つてくれるなと云つてゐたほどの山ちんが、きふに昨日になつて皆な呼んで頂戴といひ出したんですもの。明日みんなで行くわ。」

「山ちんも死ぬか。」

甚吉はこんな早いとは思はなかつたが、併しこんなふうにしはいふ言葉がない程、深くつき當つたものを感じた。

「だめかも知れないわね。」

「あんなにせいが高くてはだめ。」

「花を持つて行きますか？ それとも、くだものにする？」

「花がいい。」

「ちや花にするわ。」

「それから僕の天神様を一つ持つて行つてくれ。」

「あんな骨董品はしかたがないわ。」

「いや、持つて行け。」

明治初年あたりにつくられた天神様であつたが、加賀藩では、昔から土に上ぐすりの彩色を施し、手習ひ神のやうにした正月のかざりものであつた。土の乾きもよく、冴えた色帯も變らず、しかも、はなはだ眉はそく、まなじり上つた美男だつた。甚吉は震災後故郷の賣立で購めたものだつたが、翌日君子がでかけるときに甚吉のお見舞品として持たせる

ことにした。

娘は夕方おそくにかへつて来て、はじめて友達の死を知らねばならぬ時に出遇ひ、弱つた聲で云つた。

「山ちゃんはどんな顔をしてゐた。」

「聲がほそくてよく聞えなかつたわ、とてもだめ、あと一、二日持つて持たないくらゐですわ。」

「お醫者は？」

「もう喉まで来てゐるといつていらつしやるし、お母様は足にうきが來てゐると仰有つてゐたわ。」

甚吉はこれはもう時間的な問題で、山ちゃんは死ぬだらうと思つた。胃が固くなるやうに頭が硬くなつた。わざと氣を軽くするために云つた。
「天神様はどうだつた。」

「とても喜んで天神様をなでてゐたわ。をぢさまにもよろしく云つてゐた。」

「死にさうな気がしたかね。」

「あんなに瘠せてゐてはだめね、皆そろつて行つたものだから喜んでゐたわ。話をするともないし山ちゃんも疲れるだらうと思つてしばらくゐてかへつた。」

「そんなことが、もう死ぬ人と生きる人のわかれめ見たいなものだね。」

「ひよつとしたら今夜か明日あたりですつて。ちつとも食べものが喉にとほらないさうなのよ。」

「五人とも行つた？」

「え、せのちん、とこ、くり子、たな、それにわたくし。」

「山ちゃんだけかけるかな。」

翌日、山ちゃんはお晝頃亡くなつた。學校に電話がかかつて来て、五人とも教室のすみつこでしばらく泣くより外に、しかたもなかつた。今夜お通夜にゆくのだが、皆のいふのでは、お通夜に行つてもどんなことをお悼みの言葉として云つていいか分らないし、どういふふうにして坐つてゐたらいいかも分らないから、甚吉と一緒に来てもらへないだらうかと、皆がさういふの、と、君子は云つた。それに甚吉以外の家庭の父親達は誰一人として山ちゃんを知らないし、甚吉だけがしたしくしてゐたから、是非ついて来てほしい、山ちゃんも喜ぶだらうといふのであつた。さういへば五人の娘たちとはそれぞれに輕井澤の家で一緒にくらしてゐたから、甚吉とは、妙な知合だつたのである。ほかの娘達の父たちはまるで皆と没交渉だつたし、したしみもなかつたから、甚吉と一緒に行かないかぎり、誰も適當な人はゐなかつた。

「だから引き受けて来たのよ、それでなくともお通夜にはいらつしやるつもりでせう。」

「では行かう。」

甚吉は愉しいもののやうな氣が妙にこんな一瞬間にかんじるものだが、いま、それが感じられた。實に妙に明るなものだつた。

「品川のホームに七時にみんなが待ち合してゐるの。」

「では、すぐご飯だ。」

甚吉の妻のうめは、山ちんを可愛がつてゐた關係から、甚吉に對つて云つた。

「わたくしの分のお焼香もおたのみしますわ。いつも、をばさま早くなほつて頂戴つていつてくれたんですもの。」

「君の分もしてくる。」

中氣のうめは、二年と少し経つても、まだ、一人では歩けなかつた。感傷的になると悪いと思ひ、甚吉は元氣さうに振舞つた。

「山ちん、こちらにいらつしやいといふと傍に来ていつまでもじつとしてゐるやうな人懐こい子でしたがね。」

うめは、君子の友達の名かでも、山ちんに一等したしみを感じてゐた。

「ゆつくりしたやうなところがあつたな、あれで怒つたことがあつたか知ら？」

「あれで怒ると一生懸命になつて怒り出すわよ。」

君子はまた表に出ると、突然に云つた。

「山ちんがきのふね、をぢさまのご本まだ出ないのと云つたから、出たら持つてくると云つておいたわ。」

輕井澤滞在中の彼女らの生活を日記風に君子が手記したやうに書いた

ものを、今度の小説集に入れたのであつた。山ちんのこととも書いてあるから、出たらあげると、甚吉がさう云つたのを覚えていつたものらしかつた。

「どういつておいた。」

「あと四五日したら出来るよ云つておいたわ。」

「間まにあはなかつたなあ。」

「あとでお供へするといいわ。」

「本をかね。」

「きつとさうすれば喜ぶわ。お父様も気が済むでせう。」

そんなしらじらしいことは出来ないが、見てくれるならあげてもよかつたのに、もう間まにあはなかつた。間まにあはないことが妙にあげるを約束した手前、甚吉は本にも山ちんを感じがのこる氣持だつた。

心に變つた状態を感じてゐるときに見る、馬込の道ばたは平常と何のかはりもなかつたが、甚吉と娘とがくらい徑をゆく姿だけが甚だ異つた印象的なものに、甚吉に反射して來た。

品川驛のホームにおなじ背丈のせのちんと、とこと、たなとが、黒いオーバに白いマスクをして待ち合してゐた。電車内にはいつてくると夏以來會はなかつたが、鳥渡、頭をさげただけで、例によつて愛嬌のないものだつた。夏とは顔の感じがちがつてゐるやうに見えたが、それは夏とはずつと色が白くなつてゐるからだつた。四人が固まつておろおろ聲で山ちんがあんなに瘠せてゐたこと、なせ、入院してゐたことをあんなに隠してゐたのだらう、自分ではなほつてから話すつもりだつたに違ひないと一頻りしやべつてゐた。黒のオーバがみんなのからだに小ちやくなつてゐるほど、上級生らしい感じであつた。

有楽町の構内の柱のかけに、くり子が顔を半分階段の方に向けて待つてゐた。群衆のなかでは、なせか女學生といふものは、一きはいたいけないものだつた。深川まで車に乗つたが、大きな女學生がつぎからつぎに五人まで乗り込んだのに、運轉手も呆れて却つて道のりをたづねるのに、快活に答へたくらゐだつた。

深川の木場にある山ちんの家は、まだ、あたらしい木口を見せた三階建てであつた。

「まあ、山ちんのお部屋に電燈がついてゐるわ。」

たなが逸早く見つけてさう云ひ、皆は三階の南はづれの部屋を見上げた。

「なせ電燈なんかつけとくんでせう。」

へいせい勉強部屋になつてゐたらしいその部屋の電燈が、そのとき突

然に消された。

「厭。」

さういふと五人は一かたまりになつた。家の人が何かをさがしに行き電燈をつけたものにちがひなかつた。五人の女學生はみな白いマスクを一等さきに外し、オーバのポケットにはさみ込むと、そのままオーバを脱いだ。それから襟もとをなほしほんのしばらく制服のまま、何やら身じまひをしてゐたが、いかにも恭愼の思ひがこめられた感じであつた。

山ちんは花の模様のあるふとんを着て、ほんの人間の形だけをあらはした程度で、平つたくなり、いたいけに寝かされてあつた。顔には白い布がかけられ、これが夏の日にあかしかいじんの歌のことをいつた山ちんとは、あまりに早く變つたものであつた。例の甚吉のおくりものの天神様は、枕もとから近くの臺の上に、冠を正してそなへてあつた。女學

生だちは一人づつお焼香をし、一人づつ永いことかかつて黙禱のやうなことをして、さがつて行つた。全體の感じは明るくて、そこに人の死があるとは思へなかつた。

「夏はたいへんお世話になりました。」

お母さんが出てさういひ、甚吉は惜しいことをしましたと云つた。

「この子は一度捨子にして親戚の者にひらつて貰つて、入籍して育てたほど大事をとつてゐたんですが、とられるときはどうにも致し方がございませぬ。」

お父さんはこれのさきの子もとられたと云はれたが、甚吉は言葉すくなく、何を考へるともなくかういふ時にする漠然たる状態をつゞけてゐた。

五人の女學生だちはめだたぬほどにすゝり上げてゐて、臉がふくらん

で異様に傷ついたりやうな美しさを見せてゐた。あまり長居することが悲しさあまつて、むしろ居苦しいふうであつた。長居させてはいかぬやうな気がし、甚吉はさつきから考へてゐたことを隣にゐる君子にそつと告げた。

「禮儀としてもう一遍山ちんの顔を見せてもらふか、それとも、見ないでこのまゝ、歸るか、皆さんに聞いてくれ。」

甚吉がつき添うてゐながら後に顔も見なかつたといはれるのも、甚吉の手落のやうなものだつた。と云つていきなり死顔を見てから、あとに頭にのこり少女の心をいたみやすくするのも、大人氣ない遣り方だつた。そこで君子は、とこにそのことを告げると、とこはくり子にそれをつたへ、くり子はせのちんにあなた山ちんの顔見る？ 見ないでかへる？ どう？ といふふうに次々に顔と顔を一應よせあひ、低い聞きとり

くい唇のさきでいひ合ふのだった。しかも、それだけのことで皆の顔は緊張してかたくなつて行つた。物怖ぢと、氣の毒さまで、彼女らは死んだ親友の顔を見ないのも悪いし、見るのは怖いし、どうしていいやら何か迷つてゐるふうだった。甚吉は一そだまつて居ればよかつたとも考へた。

「見なくとも悪いことはないのだよ、皆にさうお言ひ。」

甚吉は君子にさう注意し、君子はそれを皆につたへた。

最後に君子は甚吉に皆の答へに答へて云つた。

「みんなあとでいやだからつて顔見ないと云つてゐます。」

「さうか、それでは僕がこんどお焼香したら、もう一遍お禮をしてかへることにしよう。」

甚吉はまづお別れの香を焚いた。山ちゃんよ、さやうなら、今年の夏は

おもしろかつたね。押出シに行つたこともいゝことをしたし、さんご色の指輪もはめて山ちゃんはいゝところに行くのでせう。けふはみんなのお供をして來たが、それでなくともきつと遣つてくるつもりでゐた。これから歸りはぎんざに行くともみんながいふだらうし、をぢさんも行かなければならん。さやうなら、甚吉が焼香をすませると、五人の友達もつぎつぎに永く別れる挨拶をして行つた。

外に出ると、女學生達はぐるつと輪をつくり、れいの雪をくはへるやうな純白なマスクをかけた。それが一やうに同じしぐさを同じ時間になされるので、甚吉は嘗て見たことのない規則正しいものの美しさに打たれた。

「とても山ちゃんは白い手をしてゐたわ。」

「あら、手が見えたか知ら？ 見えなかつたわ。」

「ちやんと胸のうへに手を合せてあつたわよ。」

甚吉はその手は裾の方にゐたから、見る事がなかつた。
くるまに乗ると君子は云つた。

「お父様、ぎんざ。」

「さうか、何か食べるか。」

「お茶とみつまめで結構だわ。」

君子はほかに何もいらぬといふのであつた。

くるまから降りた銀座はうす暗く、黒いオーバに身をかためた五人の娘達と連なつて歩くことが、どこか野蠻めいたところがあつて外國の女消防手のやうに、妙に男性的な美しさがあつた。お茶を喫みに白い建物のなかにはいつて行つたが、椅子につくと、娘たちはおもむろに耳のところに手をやり、耳から白いマスクの紐を外した。先刻もそれをなよら

かなものに見たが、甚吉はそのマスクは少女達の唇をまもり、それを粧ふ質素な被ひのやうに優婉なものに思つた。彼女らは話をしいしいマスクを二つに折り卓の上に置いて、實におちついてお茶を喫み出した。あ、美しいと甚吉は感嘆した。しかもどの少女も甚吉とは話をしすに、ちつとも甚吉の存在なぞに氣をつかはず、禮儀正しくお茶を喫む分量も言ひあはしてゐるやうに一すすりしては卓の上に置き、そしてまたおもむろに口に茶碗を持つて行つた。かくて、彼女らの唇はぬれ、ぬれたために顔の全部がきふに柔しくなつた。

「ねえ、このあひだから山ちんのゆめばかり見るのよ。」
とこがいひ出した。

「あら、わたくしもゆうべあれから歸つて見たのよ、山ちんがぎんざに行かうといつたから、あなた死んぢやつたぢやないのといふと、そお、

をかしいわねといふの。」

たながとこの眼を見て、二人ともおなじゆめを見るのはふしぎだと云つた。その時、くり子がとても不思議ね、わたくしもゆうべゆめ見たのよと云つた。

「山ちゃんがいつも有楽町のバスで別れるでせう。なのに、ずっと四丁目までついてくるの。だから山ちんどうかしてゐるわねけふは、まつづく行けば築地ぢやないのといふと、そお、どうかしてゐるわねと同じことを云つて、くるつとうしろを向いて行つてしまつたの。ゆめつて變なものね。」

「ぢや、今夜あたりはわたくしの見る順番かも知れないわ。こはいな。」
せのちんがさういふと、たなは怖いことなんかちつともないといつた。
「とてもさつぱりした感じがするわ。ゆめつて責任がなくていいわ。」

甚吉は三人ともおなじ友の夢を見たといふことで、その友情のやうなものが友情的な本物で、決して二十を越したら見られるゆめでないと思つた。

この四人の娘達に山ちんを加へて、去夏、輕井澤で生活した時、甚吉は一人だけ縁側にお膳をすゑて食事をし、娘達は座敷の真中にぐるつと食卓をとりまいてゐた。料理をするのを娘達はそれぞれにはこんで行き、甚吉のお膳にもつきからつきへひと皿づつ置いて行つた。一人が刺身をもつて来てくれれば、つぎの一人が焼肴をはこんで来てくれ、また、つぎの一人が酒のつまみものを膳の上に加へてゆくといふ賑やかなものであつた。誰かが置いて行つて皿の繪の向きが反對についてゐるのを、八百善の娘であるくり子が指に反りを打たせて、皿の向きをなほして行つた。食後はきまつて町に散歩にでかけた。ひとしきり鏡臺の前に折りかさ

なつて顔をなほし、いくらか白いものも夜はつけるらしかった。町に出ると何でも欲しい盛りである彼女らは、装身具のある店では永い間動かなかった。そしてお汁粉屋の前では、いま食事が済んだあとなのに、何かお互ひにささやき合つて立ちどまつた。立ち停つてお汁粉に思ひをやるときの皆の顔は、そのままでも愛すべき子供たちだった。

「歩けないのか。」

「ええ、とほりすぎは出来ないわ。」

君子がうごかすそれをきツかけに皆は頑として歩かなかつた。誰かがぶつと噴き出し、誰かが笑ひ聲をはね飛ばすやうに一聲高くあげた。

「ではお汁粉にしよう。」

「理解があるわ。」

お汁粉屋でも、はいつて了へば甚吉はいつも存在が認められず、例に

よつて仲間外れだった。彼女らはお茶をかへて喫んだ。

山ちゃんはこちらに来てから食慾が出たといつてゐたが、みんなの半分しか食べなかつた。皆が碓氷峠に登つたときも、山ちゃんは山道がのぼれないので一人で留守をしてゐた。書齋にゐる甚吉は山ちゃんがゐるのかわらないのか、分らないくらい溫和しく静かだった。

茶の間に出てゆくと山ちゃんは、何かの本をよみつゞけてゐた。

「それ何の本？」

「これ、きまりが悪いわ。」

山ちゃんはいままで読みふけてゐたらしい頭のぼやけてゐるやうな眼付をして、それでも、素直に本の表紙を返して見せた。

「大迫倫子の本か、面白い？」

「まだ読みかけなのよ。ちよつと面白いところもあるけど。」

甚吉はばらばらと頁をめくつて読み、はなはだ隨筆的なものであるらしく、かういふ女の人と話をすることが控へられるやうな、物の見方が甚吉とははんたいな人のやうに思はれた。

「大迫といふひとは女學生に人氣があるの。」

「齒ぎれのいいところがみんな好きなんです。」

「それ買ったの。」

「た、なから借りましたのよ。」

「いつかの明石海人とはどう？」

「まるでちがひますわ。」

「たとへばどんなところが違ふ？」

「あかしかいじんは一生懸命でせう。ですけれどこの人、早口で、どこかいちわるに見えるわ。」

「男からいふと將にいちわるだ。」

「みんな感じてゐることを先に書いただけよ。」

「山ちゃんは批評家だね。」

「まあ、いや。」

山ちゃんはとうやら讀書家で、ちよつとした批評的ないところもあつた。そして物の見方にも、人とは、さきに感じる迅さがあつた。

「何處を見ても夜明けみたいね。」

或る日、そとを歩きながら、若い林の枝々を透く空のあまりに明るいそれを、こんなにうまくいふのだつた。

お晝はいつもパンをたべるが、山ちゃんは焼くには焼くがうまく焦がすことを知らなかつた。

「牛乳は薄皮のこない時がいいのよ。」

「へえ、僕はまた薄皮ができるころがいいのかと思つた。」

「皮がきたらいけないわ。」

甚吉は牛乳をおろした。永い間、牛乳に皮が張るのを甚吉はいいのだと考へてゐた。しかし、これほど穿つたことをいふ山ちゃんは胡瓜をあへることも、パンを柔かくことがすことも知らなかつた。甚吉は山ちゃんばかりでなく、娘達は何をどうこさへることさへ知らないのを却つて娘らしく感じた。

甚吉は勢ひ胡瓜を一寸くらゐの長さに切り、さつと洗つて鹽でまぶし、しばらくして食べるために皿に伏せておいた。

「山ちゃん、トマトくらゐは剥けるでせう。」

「それくらゐはしますわ。」

「パンは僕がうまくやく。」

「何もできないでこまるわ。」

お晝をたべたあと、また、山ちゃんはゐるのか、ゐないのか、分らないほど静かだつた。

山ちゃんは化粧をする鏡臺の間にゐるらしく、そこは明るく本を讀むのにもいいし、往來も見える五疊の湯殿つゞきの居間だつた。鏡臺を中心に化粧道具がならべられ、どうかするとタオルやらジャケットやら靴下で足の踏み場もない脱ぎすての一杯ある居間だつた。そしてそれらの亂雑さがまとめられると、たちまち一物ものこらずに片づけられる部屋だつた。亂すことも亂すが、きれいにすることも手早いのが娘達の性格的なものであるらしかつた。

皆が山からもどつて來た時にも、山ちゃんはこの部屋で假睡をしてゐた。

「山ちゃん、ご飯の用意できた？」

「君子が甚吉の顔をみなながら云つた。

「をぢさまにみなしていただいたわ。」

女中も一緒に行つて女學生たちと遊ぶことがうれしかつたと見え、山
ちんにいろいろさせて濟まないと云つた。

翌日、輕井澤ともお別れに二手橋に行き、貞吉が寫眞をとることにな
つた。貞吉は石垣の上に腰かけるといいと云つたが、ちよつと高くての
ぼれなかつた。それを次から次へと手をつないでのぼつて行つた。

「眼がくらくらするわ。」

川の中にはやつと青いひとすちの水が、せせらぎをつくつてゐるばか
りだつた。河原の石もまぶしいくらゐ日に輝いてゐるし、みんなのスカ
ートも眼に痛いくらゐの反射をひらめかしてゐた。彼女らは高い石垣の
上に腰かけ、みな一樣の白いスカートと帆のやうに立ててゐた。人とい

ふよりも遠くからは白い蝶のやうに見える程、スカートの純白があざや
かだつた。

お茶を喫んでしまふと、また、例のマスクを口にあてがひ、片手で
さへ、べつの片手で耳に紐をかけた。四羽の白鳥はそれぞれに雪をくは
へて立ち上つて、街路に出た。

一等日本的な感じのするたなは、一人はなれて云つた。

「今夜これからおけいこをつけていたただかなければならないのよ。」

「明日はおさらひね。」

「だからいまからでも行くわ。」

たなは、踊りをならつてゐた。くり子も、やはり踊りを前からならひ、
音楽家を父に持つせのちんは、ひそかに獨逸語を姉とさらつてゐた。

そこは、君子とおなじくピアノをたたいてゐた。

「ちや、みんなで行つていらつしやい。」

たなは、一人だけ去つて行つた。

銀座にこんなバラックの店があるかと思ふほど、細いやつと通れるやうな小路の奥にみつまめを食べさせる店があつた。木口、椅子、暖簾なども俗悪極まつたものだが、客も、娘さん、女學生、會社員、中年の女、學生といふやうに、ごつちやになつて埃くさいものだつた。田舎によくある氷水屋とおなじ感じの粗悪なものだつた。

「こんなところが銀座にあるとはちつとも知らなかつた。」

甚吉は混みあうて腰をおろしやうもない一杯の客を見て、呆れた顔つきだつた。

「お父様なぞのいらつしやるところぢやないんですもの。」

君子はただ笑つてゐた。どこにも腰掛けられずにその店を出たが、かういふ店がいたるところにあるらしく次の家で、やつと腰をおろすことができた。ここはまづいの上と君子がいひ、どこがうまいのか訊ねる氣もなかつた。甚吉は小用に立つてもどつて來た時、すれちがひにはいつて來た女客がすぐ甚吉の椅子がはしの方に一つ空いてゐるのを見付けて、腰をおろし、横を向いてみつまめを注文した。甚吉は手で制してこのままおれは立つてゐると云つて、女客をそのままにして置いた。この客は甚吉のゐることを知らなかつたのであらう、甚吉はそのため、ずつと立つたきりだつた。

娘達は悠然と例によつて甚吉がゐようが、ゐまいが、そんなことに氣をつかはずに、みつまめを匙ですくひ、それを各々のちひさい口にもつて行つて、まるで口になべさせてゐるやうなものだつた。たうとう、最

後まで甚吉は立ちすくんだままに、時は過ぎて行つた。

「そろそろ出よう。」

「もうちよつと。」

一杯のおしるこにそんなに永く時間がかかるかと思ふくらの、彼女らはその濃いココア色でくちびるをそめ、甚吉にはちつとも分らない、例のくしやくしやした聲で落ちつきはらつて話し込んでゐた。こんなふうだから町にでかけると、いつもおそくなるのだと甚吉はひそかに思つた。

甚吉は金をはらひに行つてゐるまにあれほど澄しこんでまだ却々手間がとれると思つた娘達は、もうそろつて立ち上り、れの白いマスクでさちんとくちびるの上を被うてゐた。早いことも早手廻しの連中だと思はざるをえなかつた。がたびしの階段を下りたが、此處の家の二階は普通の家の二階とはすつと低いものだつた。そんな感じが益々甚吉に妙に

奇怪な感じをもよほさせ、こんな家のある銀座といふところの安つぼさが、はじめて分つた。

そとに出ると、君子はいたく同情の語勢で云つた。

「けふはさんざんで可哀さうだつたわね。」

「けふははじめからその覺悟でかけて來たんだ。」

「ぢや、どこかでお酒のんでいらつしつたていいわ。」

「君はどうする。」

「待つてゐるわ。」

「いや、一緒にかへらう。」

甚吉は夕方の酒もひかへめに飲み、もう腹が空いてどこかで一人でゆつくり酒にしたしみたかつた。だが娘を一人で家に歸すことがへいせいと違つて、なせか振りきることができなかつた。そのくせ、酒は酒で飢

ゑるやうに飲みたかつた。

「やはりどこかで一杯やることにしようか。」

「だから行つていらつしやいと云つてゐるのよ。」

「いや、よさう。」

甚吉は思ひきりわるく瓮石のうへに立つたまま、けふだけはよさうと、口だけでさう云つた。

「行つてらつしやればいいのに。」

さう云ふ君子に、ところも、同情するがごとく云つた。

「わたくしならちつとも構ひませんのよ。」

くり子とせのちんはバスで歸ると云ひ、二人だけはなれて立つてゐたが、思ひ切るやうに云つた。

「むろつ子、バスが来たからここで失禮するわ。」

「初七日にまた逢ふわ。」

口数のすくないせのちんはだまつて頭だけ下げ、甚吉らに別れて行つた。きふに二人になると、妙にまはりが空いたやうな感じであつた。

甚吉はもう一人になつて酒をのむ氣がおこらなかつた。

「家の茶の間で飲まう。」

「いよいよ可哀さうね。」

家にもどると茶の間の簞笥につかまり、うめはやつと立つ足の踏みしめる稽古をくり返してゐる最中だつた。簞笥から襖へ、襖から床の間へ、そして柱々をたよりに左の手でつかまつては少しづつ歩いてゐた。まだ右の手はまるで利かなかつた。明るい茶の間ではあつたが、やはり、いつも坐つてゐるうめの立つた姿は異様なものだつた。そばに女中もゐなかつた。

「人のゐない時に立つのは危くていけないね。」

甚吉はさう注意を加へた。

「山ちゃんはとうでした。」

「お人形さんのやうに小さくなつてゐた。死んでみると人間のかさなんかわづかなものだね。」

甚吉はつとめて山ちゃんの話を避けようとしたが、うめは、山ちゃんのお母さんに會つたかとたづねた。

「ちつとも喉にものがとほらないくせに、死ぬ日に紅茶を二杯とかすてらを一きれたべて、ああうまいと云つたさうだよ。」

どういふ病人でも死ぬ前には時間的によい目を見せる、あれは病勢にもかかはらず一體どういふものであらう、甚吉の分らないことはこの一つのことだつた。

「そして山ちゃんのいふやうには、お母さんいろいろ我儘をいつて濟まなかつたわ、なほつたら我儘はもういはないと云つたさうだよ。」

甚吉はもうあとはいはずに持つて來た酒をのみはじめた。華やかな明るい處女の死がいまは音楽のやうにかすれて美しく彼のまはりにあつた。

8971

細川堂書 7



蝶

發行 一九零年二月二〇日

著者 室生犀星

刊行 細川武夫

瀧紙 小林義次郎

印刷 牧恒夫

細川書店

東京神田區四馬町二一

定價 八拾五圓

終

